

図解 腰痛学級 第5版

川上俊文 ● 著

〔評者〕山下敏彦(札幌医大教授・整形外科)

本書の初版が発刊されたのは1986年である。筆者は初版以降、改訂のたびに本書を買い替えており、もう20年以上も愛読していることになる。当時まだ研修医だった筆者にとって、図が多くコンパクトに腰痛を解説した本書は、非常に魅力的だった。初版から4版は、各項目が基本的に見開き2ページ(左が図、右に解説文)にまとまっており、日常の腰痛診療で疑問に思うこと、より詳しく知りたいことに明解に答えてくれた。筆者の患者への説明(ムンテラ)は、ほとんど本書の内容を基にしていた。したがって、川上俊文先生は、筆者にとっての腰痛診療の先生であるといっても過言ではない。

今回の改訂で、本書は思い切ったバージョン・アップを遂げている。筆者が気に入っていた見開き2ページの形式が廃止されたのはやや残念だが、図と写真が多用されている特長は変わらないし、2色刷りで読みやすく工夫されている。そして、何より内容がより広範かつ多角的なものとなりボリュームも大幅にアップしている。もはや、これまでの一般向けの解説書というイメージはなく、腰痛に関する立派な「成書」であるといってよい。疼痛の神経学的・薬理学的メカニズムから脊柱のカイネティクスまで、最新の知見が取り入れられており、川上先

生の up-to-date な文献・情報の収集力、分析力には感服する。しかし、初版以来貫かれてきた、語りかけるような平易な記述は健在である。布団の硬さからタバコや性生活の可否に至るまで、外来で患者から訊かれて答えに窮するような質問も、Q&A形式にして随所にまとめて掲載されている。このような、どの教科書を捲っても書いていないことこそ、実は患者や一般臨床医が知りたいことなのである。

本書のもう一つの特長は、川上先生ご自身が実際に行われた臨床研究のデータや、さらには先生ご自身が経験された数度の腰痛体験が随所に提示されていることである。すなわち、本書は実際の臨床で先生が獲得されたエビデンスに基づく「生きた」知見・情報に満ちており、従来の紋切り型の記述や定説の復唱にとどまる教科書の対極にあるものだといえる。エビデンスといえば、欧米の腰痛ガイドラインが思い浮かぶが、先生はそれらをそのまま受け入れるのではなく、ご自身の臨床経験に照らし合わせ、日本の現状により適合した治療体系を提唱しておられる。

このたびの、装いも内容もグレードアップした『図解 腰痛学級 第5版』は、まさに川上先生の腰痛診療・研究の集大成といえるものである。本書は、一見する



と患者・一般向け実用書ともとれるが、実際には、医師が患者に腰痛を説明するため、いやむしろ医師自身が腰痛を理解するための本である。もちろん腰痛治療にかかわるコメディカル・スタッフにとっても大いに役立つだろう。本書は、これから腰痛を勉強しようとしている研修医には「入門書」として、日常の腰痛診療で壁にぶつかった専門医には「手引書」として、そしてすべての人にとって面白く読める腰痛の「読み物」として、迷わず推薦できる一冊である。

B5 頁328 2011年
定価3,990円(本体3,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-01237-9]
医学書院 刊